

主観的感情特性尺度の作成^{1), 2)}

——基本感情に基づく感情特性尺度の信頼性・妥当性の検討——

平 井 花

論文要旨

本研究では、基本感情に基づく主観的感情特性尺度の作成を試みた。研究1の調査1の質問紙調査では (Time1: $N=192$, Time2: $N=324$)、他の感情特性尺度 (DES-IV) および感情状態・感情調節・回復力尺度との相関・偏相関から妥当性が、1か月後の同尺度との相関、 α 係数および確認的因子分析から、信頼性の確認がなされた。また調査2の質問紙調査 ($N=118$) では、LOC (Locus of Control) は DES-IV の怒りと嫌悪感との間に正の相関が認められた一方、主観的感情特性尺度との間に相関は認められず、尺度の弁別的妥当性が確認された。研究2では携帯を用いた調査によって予測的妥当性の検証がなされ ($N=134$)、主観的感情特性尺度が日々の生活の中で感じられる感情を予測することが示唆された。一連の調査から、信頼性・妥当性のある感情特性尺度が作成されたことが確認された。

キーワード 【感情特性、基本感情、感情状態、妥当性、信頼性】

問題と目的

感情を喚起する出来事に際して、個人ごとにその出来事によって喚起される感情の種類・強度・意味合いは異なる。またそれらの日常経験から、人は“怒りっぽい”、“悲観的”、あるいは“無感情”といった性格だと自身を捉え、時に他者からもそのような評価を下されることがある。このように人の感情の認知の違いは他者、そして自己によって認識されており、“感情特性 (affective trait)” として提唱され、研究がなされてきた³⁾。

感情特性について、Lazarus (1994) は“順応に関わるような遭遇・衝突に対して、特定の感情的な方法で反応する気質もしくは傾向”、“個人の中で繰り返される感情状態の傾向”と説明し、また Watson & Clark (1994) は“長期的で一貫した感情経験に関する個人差”、“気分状態を経験する傾向における安定した個人差”と説明している。これらを簡略化すると、感情特性とは、安定的で一貫した感情経験の個人差、もしくは個人傾向と定義される。なお類似概念として情動性 (emotionality) が挙げられるが、こちらはより生得的な感情特性と捉えられ、遺伝的・気質的要素が強いものとされる (Rothbart, 1981; Buss & Plomin, 1984)。

感情特性については、環境・親からの養育の影響を受けることが示唆されており (Belsky, Fish, & Isabella, 1991; Magai, Distal, & Liker, 1995)、その後の生活環境に応じて元々の生得的な情動性は変化していく。感情特性と情動性の両者を強く区別するのであれば、まず原始的な“情動性”に基づき個人は日々感情を喚起するような出来事を経験し、それに対して意識/無意識的な制御を加えており、この過程の中で主観的感情を経験する (主観的感情が喚起された後に、更に感情制御が行われることも勿論ある)。この一連の過程の途中、もしくはその最終的な感情状態を参照し、個人は“感情特性”として自身の個人特性を認識する。またこの過程が繰り返され、同経験を重ねることで感情特性は固定化するものと考えられ、時に種々の経験によって、その後も変化もしうると考えられる。

このような形成過程を考慮すると、感情特性と感情制御⁴⁾とが互いに密接に関連する概念であることは明らかである。一般的にも、かなりの労力を資して感情制御をしている人を除き、怒りの感情を上手く制御できている人は、自身を“怒りっぽい”とは捉えてはいないと考えられ、両者には負の関係があることが示唆される。これらの諸概念について言語による定義は可能であるが、前述のとおり感情特性と感情制御は完全に切り離すことは難しく、また実際のところ、感情制御・経験の影響が及ぼされる以前の生得的な情動性を測定することは困難である。そのため感情特性の研究に際しては両者が関連していること、また因果関係の特定が難しいことを考慮しなければならないと言える。

感情特性に関する研究

感情特性については種々の尺度が作成され、他概念との関連が調査されている。研究によっては単語に附随する感情の側面 (岩原・齋藤, 1999) や感情制御等の感情に関する性格特性 (小浜, 2010) を指して用いられていることもあるが、それらを除いた“人の感情の認知のしやすさ”を指す感情特性の研究を、以降で概観する。

感情特性研究の第一研究として挙げられるのが、認知との関連を調査したものである。伊藤 (2000) は気分一致効果の生起において、感情特性が気分状態やそれに続く処理方略の選択・認知構造の活性化、およびその後の認知に影響を及ぼしようとしている。また坂上 (1999) は、感情状態とは独立に感情特性が感情に関する認知と関連することを示した。また加藤・加藤・杉村・赤堀 (2008) は、Text コミュニケーションにおける受信者の感情面に及ぼす感情特性の影響に注目し、送り手と受け手の感情特性によって、メールの解釈および喚起される感情が異なることを示した。なお、このように人の認知に影響を及ぼす感情特性は、親子間で関連があることが示唆されており、山内 (2009, 2010) は感情の二重過程モデルの枠組みから認知レベルの学習 (言語的やりとり) によって感情特性が伝わることを示している。

感情特性に関しては他概念との関連も調査されており、水子・寺寄・金光 (2002) は、ボ

ジティブ感情特性が結果予期・効力予期を高め、対人相互作用量を増加させるのに対し、ネガティブ感情特性は情緒的・道具的援助に異なる影響を及ぼすことを示した。また境界性・依存性・回避性パーソナリティ障害特性は特性自尊感情と負の関係にあることも示されている（市川・望月，2014）。更に前述以外に、特定の感情に対する感情特性を調査した研究もあり、“もったいない”感情特性尺度を作成し、実際の行動との関連を見た研究や（黒川，2014）、恥の感情特性に関する考察（久崎，2010）も存在する。

感情特性の測定

このように種々の研究が行われている感情特性の測定法としては、特定の個別の感情のみに着目したもの、ポジティブ感情・ネガティブ感情・中性的感情の大分類で測定するもの、そして喜び、怒り、悲しみ、恐怖、嫌悪感、驚き等に細分化するものがある。

個別の感情に着目した感情特性尺度の著名なものとして、Spielberger（1983）の状態－特性不安尺度（State-Trait Anxiety Inventory: STAI）が挙げられる。彼は不安を、状況によって変動する状態不安と、比較的安定した個人の性格傾向としての特性不安とに区別し、尺度を開発した。また Hathaway & McKinley が開発したミネソタ多面式性格目録（Minnesota Multiphasic Personality Inventory: MMPI, cf. MMPI 新日本版研究会，1993）では感情特性の一部として抑うつ性尺度が設けられており、感情特性の測度として用いられることがある。その他、特定の感情のみに着目した感情特性尺度も作成され（黒川，2013）、研究が行われている。

ポジティブ感情・ネガティブ感情・中性的感情の大分類に基づき、それぞれの下位尺度で感情特性を測定するものとして本邦では、寺崎・岸本・古賀（1992）、寺崎・古賀・岸本（1994）の多面的感受性尺度（Multiple Mood Scale -Trait; MMS -T）がある。これは感情状態を測定する多面的感情状態尺度（寺崎・岸本・古賀，1992）の質問法を変え（状態「今、現在それらの感情をどの程度感じているか」、特性「普段それらの感情をどの程度感じているか」）、感情特性を測定できるようにしたものである。多面的感受性尺度は、肯定的感情を測る3尺度（活動的快、非活動的快、親和）、否定的感情を測る3尺度（抑うつ・不安、敵意、倦怠）、中性的感情を測る2尺度（集中、驚愕）の8下位尺度から構成されている。多面的感情状態尺度は先行研究等から感情状態を表す語を広く集め、ボトムアップ的に尺度構成されており、海外の尺度との構成の類似性も示唆されている。教示を変えることで感情状態・感情特性の両者の測定を可能にした尺度を作成した先の研究としては Positive and Negative Affect Schedule (PANAS; Watson, Clark, & Tellegen, 1988) が挙げられる。この尺度はポジティブ・ネガティブ感情に関する形容詞に自身が当てはまる程度を回答させるもので、ポジティブ・ネガティブ感情特性を測定することが可能である。

また Izard（1993）は個別情動尺度 IV 版（Descriptive emotion scale IV; 以下 DES-IV と

する)を作成し、状態・特性としての感情の測定に用いた。DES-IV では興味・喜び・驚き・悲しみ・怒り・嫌悪・軽蔑・恐怖・内気・恥・罪悪感・自己敵意の 12 感情が取り上げられている。この尺度はそれぞれの感情を経験する頻度によって感情特性を測定しているため、間接的な質問で感情特性を測定することが可能である。他に数種類の感情を取り上げた尺度として、山内 (2008) は、場面想定法を用いて 6 種類の感情特性 (怒り、喜び、悲しみ、不安、恥、罪悪感) を測定する尺度を作成した。この尺度は、他者評定により幼児の感情特性が測定できるという特長がある。また Plutchik & Kellerman は感情とそれに関連する個人特性・機能を測定する Emotion Profile Index (EPI) を作成し、その後日本版も作成された (Hama & Plutchik, 1975)。この尺度では喜び・驚き・悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖・期待・受容の 8 つの感情を取り扱っており、本邦でも研究が行われている (三根, 1995, 1998, 1999; 齊木, 2014)。また複数の感情に関する感情特性尺度の内、状態・特性の両者を測定することが可能なものとしては、邦訳もされている McNair, Lorr, & Droppleman の Profile of Mood States (POMS, 横山・荒記, 1994) が挙げられる。この尺度での感情特性の測定法は、感情に関する形容詞に“普段の”自身がどの程度当てはまるかを回答させるものであり、緊張・抑うつ・怒り・活気・疲労・混乱の 6 因子から構成されている。

以上のように、感情特性の測度にはそれぞれ特徴のある種々の尺度が用いられており、研究の目的に沿って使用する尺度が選定されている。しかし前述の尺度には、複数の感情を取り上げ、本人に直接的に質問するという手法 (e. g. あなたは怒りの感情を感じやすいですか) で感情特性を測定する測度はない。これはおそらく、本人に感情特性を直接的に尋ねる場合、その時の本人の状態や社会的望ましさの影響を受けやすいためと考えられる (Watson & Vaidya, 2003)。しかし一方で、感情の経験頻度等を回答させる感情特性尺度は、社会的望ましさの代わりに、外的事象に対する統制の困難さといった変数の影響を受ける可能性もある。直接的な自己認知に基づいて感情特性を測定する方法と、感情の経験頻度等、ある種間接的な方法で感情特性を測定する方法、両者にはそれぞれ特長・限界が存在するため、感情特性研究においては両方の測定法での研究の蓄積が望まれる。

本研究の目的

そこで本研究は、個人の主観的な認知に基づいた主観的感情特性尺度 (Subjective Affective Trait Scale; SATS) を作成することを目的とする。なお本尺度では、自己認知・他者認知されやすく、日常的に使用されている感情をベースにすることとし、Ekman (1992) の 6 つの基本感情 (喜び・驚き・悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖) を取り上げることとした。

仮説

研究 1 研究 1 では、主観的感情特性尺度の作成および妥当性・信頼性の確認を行う。

まず内的一貫性と時間的安定性の観点から信頼性を検証する。また DES-IV・感情状態と主観的感情特性尺度との間に正の相関関係が認められるかを調査し、併存的妥当性を確認する。

次に、感情特性と関連が深いと考えられる感情制御・回復力の尺度を用い、構成概念妥当性を検証する。感情特性の定義から、感情を感じやすい人は感情を表出しやすいと考えられるため、感情制御とは負の関連があることが推測される。またポジティブ感情特性は肯定的な個人特性と関連し、ネガティブ感情特性はその逆を示すことが予測される。なおニュートラルな感情は感情価が中立であるため、種々の特性と関連を示さないと考えられる。

最後に、主観的感情特性尺度と既存の感情特性尺度である DES-IV の比較を行う。先に述べた通り、DES-IV は感情を喚起する出来事の実験頻度をベースに質問を構成しているため、内的・外的統制可能性と関連があると考えられる。外的統制の信念が強い場合、統制不可能な外的作用によって感情喚起事象が生じていると捉え、自身の感情特性をより高く見積もる可能性が推測される。つまり DES-IV は本来の測定対象である感情特性（私は〇〇な感情を感じやすい）だけでなく、感情喚起事象に対する信念（私には〇〇な感情を引き起こすような出来事がよく起きる）をも含めて測定している可能性があるということである。そのため DES-IV では統制可能性との関連があり、この傾向は特にネガティブ感情において顕著にみられることが予測される。一方、主観的感情特性尺度は感情に対する認知傾向を尋ねる項目から構成されているため、統制可能性との関連は低いと考えられる。そこで Rotter (1966) の提唱した Locus of Control（以下 LOC とする）を用い、主観的感情特性尺度と DES-IV、それぞれとの関係性を比較し、主観的感情特性尺度の弁別的妥当性を検証する。また主観的感情特性尺度の独自性を検証するため、同概念の DES-IV の影響を取り除いた上でも、諸概念との関連が見られるかを確認する。

研究 2 研究 2 では研究 1 の尺度作成後、尺度の予測的妥当性を検討する。方法としては参加者に 1 週間、日々の感情状態を報告してもらい、事前に測定した主観的感情特性尺度が 1 週間の感情状態を実際に予測するかを検討する。感情の感じやすさについては性別の影響が指摘されるため (Gross & Levenson, 1995; 野口・佐藤・吉川, 2005)、分析では重回帰分析を用い、性別、主観的感情特性尺度および両者の交互作用項によって 1 週間の感情状態を予測する。これによって性別の効果を統制した上で、主観的感情特性尺度と感情状態との関係を検討することが可能となる。主観的感情特性尺度が「安定的で一貫した感情経験の個人差、もしくは個人傾向」を測定しているのならば、日常生活における感情状態を予測するはずであるため、いずれの感情においても、主観的感情特性が高いほど、日常での感情状態も高くなることが予測される。

研究 1

目的

主観的感情特性尺度の作成及び、信頼性・妥当性の確認を行う。まず DES-IV と感情状態に関する質問項目によって併存的妥当性、感情制御と回復力に関する尺度によって構成概念妥当性、更に主観的感情特性尺度と DES-IV の違いを調査するため、LOC 尺度を用いて弁別的妥当性を確認する。その後、DES-IV の影響を取り除いた上で、感情制御・回復力との関係を確認し、主観的感情特性尺度の独自性を検討する。

最後に α 係数・再検査法・確認的因子分析を用いて、内的一貫性と時間的安定性の観点から信頼性の確認を行う。

方法

調査対象者 調査 1 の Time1 では大学生 192 名（男性 110 名、女性 80 名、不明 2 名）が参加し、平均年齢は 20.22 歳 ($SD = 1.14$) であった。Time2 では Time1 の参加者を含む 324 名が調査に参加した⁵⁾。調査 2 では Time1、2 とは異なる大学生 118 名（男性 30 名、女性 88 名）が参加し、平均年齢は 19.71 歳 ($SD = 0.79$) であった。

質問項目 既存の感情特性尺度を参考に、主観的感情特性尺度は(a)敏感性、(b)鈍麻性、(c)即時反応性、(d)持続性の4つの側面から構成することとした。それぞれの内容に即して、(a)「私は○○の感情を、感じやすいと思う」、(b)「私は○○の感情に、疎いと思う」、(c)「私は何か○○を感じるようなことがあると、すぐ○○な気持ちになる」、(d)「私は○○を、長い間感じ続ける方だ」の4項目を基本感情6個それぞれについて設定し（喜びや幸せ、驚き、悲しみ、怒り、嫌悪感、恐怖）、鈍麻性を逆転項目として質問紙を構成した（5件法、24項目、(1)いいえ、(2)どちらかというといいえ、(3)どちらでもない、(4)どちらかというとはい、(5)はい）。

また併存的妥当性を検証する項目として、DES-IV (Izard et al., 1993) の内、基本感情に相当する6感情を使用した（5件法、18項目、得点範囲3－15、(1)滅多にもしくは全くない－(5)とても頻繁にある）。また6つの基本感情を示す形容詞を、日本語版 PANAS (佐藤・安田, 2001)、坂上 (1999) を参考に3つずつ選定し、感情状態を測る質問18項目を設定した（5件法、18項目、得点範囲3－15、(1)まったく当てはまらない－(5)非常に当てはまる：以下感情状態尺度とする）。下位尺度は(a)喜び（幸せな、喜びを感じている、楽しい）、(b)驚き（驚いた、びっくりした、うろたえた）、(c)悲しみ（憂うつな、悲しい、落ち込んだ）、(d)怒り（腹が立った、怒った、いらだった）、(e)嫌悪感（不快な、嫌な、嫌悪感を感じている）、(f)恐怖（恐怖を感じている、おそれた、おびえた）であった ($\alpha s = .76 - .89$)。

その他、収束的妥当性を検証する項目として感情調節尺度（吉津・関口・雨宮，2013；Emotion Regulation Questionnaire; ERQ；下位尺度；再評価（Reappraisal; RE）、抑制（Suppression; SU））、精神的回復力尺度（小塩・中谷・金子・長峰，2002；Adult Resilience Scale；下位尺度；新奇性追求（Novelty Seeking; NS）、感情調整（Emotion Regulation; ER）、肯定的未来志向性（Positive Future Orientation; PFO））を採用し、以上の5つの尺度によって調査1のTime1の質問紙を構成した。なおTime2では、主観的感情特性尺度のみを実施した⁶⁾。

調査2では、主観的感情特性尺度、DES-IV、LOC（Locus of Control 尺度、鎌原・樋口・清水，1982）によって質問紙を構成した（18項目、4件法、(1)そう思わない－(4)そう思う、得点範囲18－72）。なおLOCは得点が高いほどInternal Controlが強く、得点が低いほどExternal Controlが強いことを示す。

手続き 調査1では集団に対し上記質問紙を実施し（Time1）、約1か月後、同集団および追加の参加者に対して主観的感情特性尺度の質問紙を再度実施した（Time2）。また調査2では、調査1とは別の時期に、集団に対して質問紙を実施した。なお倫理的配慮として、回答は任意であること、データは統計的に処理され個人は特定されないことを説明した上で質問紙への回答を依頼した。施行時間はそれぞれ約10～15分であった。

結果と考察

α 係数より全ての感情に共通して不良だと判断された(b)鈍麻性の6項目を削除し、18項目で主観的感情特性尺度を構成することとした（6基本感情×3項目、得点範囲3－15）。

感情の感じやすさについては男女差が指摘されていることから（Gross & Levenson, 1995；野口・佐藤・吉川，2005）、確認のため、まず感情ごとに主観的感情特性尺度の記述統計量を求め男女差について検討した。結果、怒りと嫌悪感以外の4感情において男女差が認められ、女性の値が一様に高かった（ $t(146 - 188) = 2.87 - 5.16$, $ps < .001 - .01$, $d = .43 - .76$ ）。この結果は先行研究と一致しており、女性の方が喜び・驚き・悲しみ・恐怖の感情を感じやすいことが示唆された。また各感情特性のCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha s = .63 - .85$ となり、ある程度の内的一貫性が確認された。Table 1は主観的感情特性尺度の回答者全体および男女別の平均値と標準偏差、 t 値、 α 係数をまとめたものである。

次に、調査1のTime1の主観的感情特性尺度とDES-IV⁷⁾、感情状態、回復力、感情調節（ERQ）、Time2の主観的感情特性尺度、調査2のLOCとの相関を求めた（Table 2）。結果、主観的感情特性と対応する各感情状態間の相関が $r_s = .20 - .28$ （ $ps < .001 - .01$ ）、対応する各DES-IVとの間の相関が $r_s = .34 - .67$ （ $ps < .001$ ）となり、感情状態よりも感情特性との相関が一様に高く、主観的感情特性尺度の併存的妥当性が示された。

回復力については、喜びと新奇性追求（NS）・肯定的な未来志向性（PFO）との間に正の

Table 1 Summary for *t* Test Analysis for Variables and Cronbach's α

	<i>M</i> (<i>SD</i>)			<i>t</i>	<i>d</i>
	Whole ^a	Male ^b	Female ^c		
SATS					
Happiness	10.78	9.95	11.90	5.16***	.76
($\alpha = .79$)	(2.72)	(2.63)	(2.45)		
Surprise	8.10	7.61	8.70	2.87**	.44
($\alpha = .63$)	(2.54)	(2.22)	(2.81)		
Sadness	9.82	9.28	10.56	2.93**	.43
($\alpha = .79$)	(3.02)	(2.96)	(2.99)		
Anger	8.62	8.61	8.54	.16	.02
($\alpha = .79$)	(3.20)	(3.09)	(3.33)		
Disgust	10.19	10.40	9.85	1.19	.18
($\alpha = .77$)	(3.12)	(3.03)	(3.25)		
Fear	8.87	8.17	9.83	3.61***	.53
($\alpha = .85$)	(3.20)	(2.97)	(3.30)		

Note. SATS = Subjective Affective Trait.

^a $N = 188 - 191$, ^b $N = 107 - 110$, ^c $N = 79 - 80$.

** $p < .01$, *** $p < .001$.

相関が認められ ($r_s = .27 - .30$, $p_s < .001$)、感情調整 (ER) とその他の 5 つの感情特性間で負の相関が認められた ($r_s = -.54 - -.21$, $p_s < .001 - .01$)。また、悲しみ・嫌悪感と新奇性追求 (NS)、嫌悪感と肯定的な未来志向性 (PFO) との間にも負の相関が認められた ($r_s = -.24 - -.21$, $p_s < .01$)。感情調節尺度 (ERQ) については、喜びと再評価 (RE) との間で正の相関 ($r = .28$, $p < .001$)、怒り・嫌悪感と再評価 (RE) の間で負の相関 ($r_s = -.24 - -.20$, $p_s < .01$)、怒りと抑制 (SU) の間で負の相関 ($r_s = -.20$, $p < .01$) が認められた。なお中性的な感情である驚きでは、感情調整 (ER) を除き相関は認められなかった。つまりポジティブな感情特性は肯定的な個人特性と正の相関、ネガティブな感情特性は否定的な個人特性と負の相関があることが示され、ニュートラルな感情はほぼ全ての個人特性と関連が見られなかった。回復力の感情調整 (ER) に関しては、ポジティブ感情を除いた全ての感情で負の相関が認められたが、これは感情特性が高い人は感情を制御しないことを示唆しており、主観的感情特性尺度の妥当性の傍証となっていると考えられる。いずれの結果も仮説を支持しており、感情調節尺度 (ERQ) と回復力において主観的感情特性尺度の構成概念妥当性が示唆された。また調査 2 で実施した質問紙では、主観的感情特性尺度と LOC との相関は認められず ($r_s = -.11 - .16$, $p_s = ns$)、DES-IV の怒り・嫌悪感と LOC との間に弱い負の相関関係が認められた ($r_s = -.20 - -.22$, $p_s < .05$)。つまり主観的感情特性尺度と LOC の間に関係が認められないのに対し、DES-IV は怒り・嫌悪感の感情特性が高いほど外的統制が強いことが示唆され、当初の仮説と一致し、主観的感情特性尺度の弁別的妥当性が支持された。

Table 2 Correlations between SATS and Other Variables

	Research1								Research2
	Emotional State	DES-IV	Time1					Time2	LOC
			Resilience			ERQ		SATS	
			NS	ER	PFO	RE	SU		
SATS									
Happiness	.28***	.53***	.27***	.16*	.30***	.28***	-.03	.64***	.16†
Surprise	.20**	.34***	.02	-.21**	.06	.03	-.05	.45***	.00
Sadness	.25***	.53***	-.21**	-.47***	-.09	-.11	-.12†	.63***	-.01
Anger	.25***	.67***	-.14*	-.54***	-.05	-.24**	-.20**	.62***	-.11
Disgust	.23**	.34***	-.22**	-.46***	-.24**	-.20**	-.08	.65***	-.07
Fear	.22**	.43***	-.13†	-.23**	.01	-.10	-.07	.53***	.03

Note. SATS = Subjective Affective Trait Scale; DES-IV = Descriptive Emotion Scale IV; Resilience = Adult Resilience Scale; NS = Novelty Seeking; ER = Emotion Regulation; PFO = Positive Future Orientation; ERQ = Emotion Regulation Questionnaire; RE = Reappraisal; SU = Supression; LOC = Locus of Control.

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

Table 3 Partial Correlations between SATS and Other Variables

	Emotional State	Resilience			ERQ	
		NS	ER	PFO	RE	SU
SATS						
Happiness	.14†	.11	.09	.12	.15*	.01
Surprise	.13†	-.02	-.22**	.04	-.04	-.10
Sadness	.05	-.09	-.27***	.03	.02	-.13†
Anger	.12	-.05	-.40***	.04	-.17*	-.15†
Disgust	.15*	-.22**	-.38***	-.25***	-.14†	-.08
Fear	.09	-.08	-.09	.07	-.06	-.11

Note. Control Variable = DES-IV (Descriptive Emotion Scale IV).

SATS = Subjective Affective Trait Scale; Resilience = Adult Resilience Scale; NS = Novelty Seeking; ER = Emotion Regulation; PFO = Positive Future Orientation; ERQ = Emotion Regulation Questionnaire; RE = Reappraisal; SU = Supression.

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

なお1か月後の再テスト信頼性は $r_s = .45 - .65$ ($p_s < .001$) となり、主観的感情特性尺度のある程度の時間的安定性が確認された。また Time2 のデータの内、欠損値があったデータを除いた 299 名のデータを用いて 6 因子の確認的因子分析を行った結果、 $\chi^2(120) = 268.59$, $p < .001$, GFI = .91, AGFI = .87, RMSEA = .06 となり、適度なモデル適合度が示され、因子妥当性が確認された。

また主観的感情特性尺度の独自性を検証するため、各感情に対応した DES-IV の影響を取り除いた上で、主観的感情特性尺度と回復力・感情調節 (ERQ) との偏相関を算出した (Table 3)。結果、驚き・悲しみ・怒り・嫌悪感と回復力の感情調整 (ER) の間 ($r_s = -.22 -$

.40, $p < .001 - .01$) と、嫌悪感と回復力の肯定的未来志向性 (PFO) との間 ($r = -.25$, $p < .001$) に負の相関が認められた。これは主観的感情特性尺度が、直接的に個人の感情特性を質問していることに起因すると考えられる。つまり、DES-IV が本人の外的統制と関与した感情特性を測定するのに対し、主観的感情特性尺度は感情調整 (ER) 等、自身に対する考えと、より関与した感情特性を測定していると考えられる。

以上の結果、主観的感情特性尺度の尺度としての独自性を確認することができ、ある程度信頼性・妥当性のある感情特性尺度が作成されたと考えられる。

研究 2

目的

日常生活の中で報告される感情状態によって、主観的感情特性尺度の予測的妥当性の検証を行う。参加者には 1 週間継続的に感情状態を報告してもらい、主観的感情特性尺度が実際にそれらの感情状態を予測し得るかを調査する。

方法

調査対象者 研究 1・調査 1 の Time1 に参加した内の大学生 139 名 (男性 76 名、女性 63 名) が参加し、その内 7 日間実施した質問項目に 5 日以上回答した者を調査対象者とした。結果、134 名 (男性 76 名、女性 58 名) が最終的な参加者となり、平均年齢は 20.14 歳 ($SD = 1.17$) であった。

質問項目 研究 1 で用いた感情状態尺度 18 項目を使用した。またデータのマッチングを行い、研究 1 で測定された主観的感情特性尺度のデータを分析の際に用いた。

手続き 事前に研究の目的・手続きについての説明会を実施し、研究内容について同意した参加者が本実験に参加した。また説明会の際に、携帯電話からアンケートに回答できるかの確認作業を併せて行った。説明会の後、参加者は 1 日 3 回、7 日間継続して感情状態尺度に回答した。調査が開始された後は、定時になると実験者から参加者に対してメールが送られ、参加者はメールで指定された URL にアクセスすることによってアンケートに回答した。調査終了後、参加者には謝礼が支払われた。全体の回答率は 97.73% であった。

結果と考察

分析にあたって、まずそれぞれの変数の得点化を行った。1 週間、21 回分の感情状態尺度のデータは平均値を算出し、個人得点として分析に用いた。分析では、性別・主観的感情特性尺度を説明変数、感情状態を目的変数とする階層的重回帰分析を採用した。多重共線性の問題を避けるため、主観的感情特性尺度に対して中心化の処理を行った上で、性別・主観的

Table 4 Summary of Regression Analysis for SATS Predicting Instantaneous Emotions

	β		R^2
	Sex	SATS	
Happiness	.19*	.21†	.21***
Surprise	.23**	.32***	.20***
Sadness	.18*	.31***	.16***
Anger	.05	.33***	.11***
Disgust	.16†	.39***	.18***
Fear	.11	.21*	.07*

Note. SATS = Subjective Affective Trait.

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

感情特性尺度を第1ステップ、両者の交互作用項を第2ステップに投入する階層的重回帰分析を実施した（Table 4）。

結果、主観的感情特性尺度の主効果が一様に有意となり（ β s = .21 – .39, p s < .001 – .01）、主観的感情特性尺度の予測的妥当性が確認された。なお性別の主効果は、喜び・驚き・悲しみ・嫌悪感で有意となった（ β s = .16 – .23, p s < .10 – .001）。

なお喜びでのみ交互作用の傾向が認められたため（ $\beta = .19$, $\Delta R^2 = .02$, $p < .10$ ）、確認のため Cohen, Cohen, West, & Aiken（2003）に従い単純傾斜分析を実施したところ、男性では $\beta = .21$ （ $R^2 = .04$, $p < .10$ ）、女性では $\beta = .53$ （ $R^2 = .28$, $p < .001$ ）となった。つまり女性では感情特性から感情状態に対する予測力が高く、男性はその傾向が認められるに留まった。

以上の結果、喜びにおいて男女間での相違は認められたものの、6感情で一様に、主観的感情特性尺度が1週間の感情状態と正の関係にあることが示され、主観的感情特性が高いほど日々感じる感情状態が高くなることが示唆された。つまり主観的感情特性尺度は実際の日常生活の中で生じる感情状態を予測していることが確認され、主観的感情特性尺度の予測的妥当性が示された。

総合考察

今回の一連の調査の結果、ある程度の信頼性・妥当性を有する主観的感情特性尺度が作成された。全ての感情においてはではないが仮説は概ね支持され、研究1ではポジティブ感情特性は肯定的な個人特性、ネガティブ感情特性は否定的な個人特性と関与することが示唆された。またDES-IVとの比較、DES-IVを統制しての分析によって、尺度の独自性も示唆された。また研究2では主観的感情特性が日常生活の中での感情状態を実際に予測していることも示され、尺度の妥当性が再度確認された。

新尺度を作成するにあたっては、従来の尺度とは異なる、新たに作成する尺度の独自性が肝要となる。今回作成した主観的感情特性尺度と従来の感情特性尺度である DES-IV との違いは、LOC 尺度との相関が DES-IV においてのみ認められた点、そして DES-IV を統制した上でも感情調整 (ER) との間に負の相関が認められた点である。これは当初の仮説通り、DES-IV が外的統制に関する信念の影響を受けている可能性を示している。また DES-IV を統制した上でも相関が認められた点については、主観、自己の感情特性に対する認知を重視した主観的感情特性尺度の独自性が表れていると考えられ、本尺度の特徴として捉えることができると考えられる。前述したようにこれは、主観的感情特性尺度が感情に関する自身の認知に、より基づいていることに起因すると考えられ、主観的感情特性と感情調整 (ER) が密接に関連していることを示唆している。またこのことは序論で記した感情特性の定義とも一致する。

また日常生活の感情状態を実際に予測できたことは、本尺度の妥当性を大いに支持するものと考えられる。喜びにおいては男女差が認められたため、男女間でその予測度は異なると考えられるが、6 感情全てにおいて感情特性が感情状態を予測していた。

課題と今後への展望

感情研究に関しては、様々な限界点が存在する。本調査も該当するが、感情評定に関しては、個人特性・環境・状況の影響を受ける可能性がある。本研究でも相関・再検査信頼性・確認的因子分析で頑健な結果は得られなかったが、その原因の一つとして、感情の移ろいやすさ、感情特性回答時点での感情状態の影響が挙げられるかもしれない。主観的感情特性尺度では一般的な自身の傾向を回答してもらうが、他の個人特性の尺度同様、回答時点での個人の状態の影響を完全に除去することは難しいと考えられる。

また DES-IV との差異についても更なる検証が必要である。本調査では、DES-IV の外的統制の可能性を指摘したが、他のパーソナリティに関する尺度同様、主観的感情特性尺度は社会的望ましさ等の影響を受ける可能性がある (Watson & Vaidya, 2003)。

上記の限界点・課題を踏まえた上で、主観的感情特性尺度に関する研究の蓄積が今後も望まれる。

注

- 1) 本研究結果の一部は、日本感情心理学会第 21 回大会 (2013) で発表された。
- 2) 本論文執筆にあたりご指導頂いた伊藤忠弘教授 (学習院大学) および本研究にご協力いただいた参加者の皆様に心より御礼申し上げます。
- 3) 本研究では、感情特性・情動特性の総称として感情特性を用いる。
- 4) 感情制御・感情調整・感情調節の英訳は Emotion Regulation であり、同一のものであるが、本研究で使用した尺度を区別するため、前述の 3 語を使用する。

- 5) Time2 のデータの性別・年齢は不明。
- 6) 本研究で使用した尺度のみを記載し、分析に用いなかった尺度は記載を省略した。
- 7) DES-IV では楽しさの原語は Enjoyment であるが、主観的感情特性尺度は Ekman (1992) の基本感情をベースに作成されているため、本研究では Happiness を代替の語として用いる。

引用文献

- Belsky, J., Fish, M., & Isabella, R. (1991). Continuity and discontinuity in infant negative and positive emotionality: Family antecedents and attachment consequences. *Developmental Psychology*, 27, 421-431.
- Buss, A., & Plomin, R. (1984). *Temperament: Early developing personality traits*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Cohen, J., Cohen, P., West, S. G., & Aiken, L. S. (2003). *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. 3rd ed. New York: Routledge, Taylor & Francis Group.
- Ekman, P. (1992). An argument of basic emotions. *Cognition and Emotion*, 6, 169-220.
- Gross, J. J., & Thompson, R. A. (2007). Emotion regulation: Conceptual foundations. In Gross J.J. (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford Press. pp. 3-24.
- Gross, J. J., & Levenson, R. W. (1995). Emotion elicitation using films. *Cognition and Emotion*, 9, 87-108.
- Hama, H., & Plutchik, R. (1975). Personality profiles of Japanese college students: A normative study. *Japanese Psychological Research*, 17, 141-146.
- 久崎孝浩 (2010). 恥の個人差の発達の要因を探る (特集 感情発達) 心理学評論, 53, 62-76.
- 市川玲子・望月 聡 (2014). パーソナリティ障害特性と自尊感情の諸側面との関連—変動の大きさおよび随伴性に注目して— パーソナリティ研究, 23, 80-90.
- 伊藤美加 (2000). 気分一致効果を巡る諸問題—気分状態と感情特性— 心理学評論, 43, 368-386.
- 岩原昭彦・齋藤洋典 (1999). 記銘語の感情特性が想起意識の有無に及ぼす影響：過程分離手続による検討 電子情報通信学会技術研究報告, 98, 47-54.
- Izard, C. E., Libero, D. Z., Putnam, P., & Haynes, O. M. (1993). Stability of emotion experiences and their relations to traits of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 847-860.
- 加藤由樹・加藤尚吾・杉村和枝・赤堀侃司 (2008). テキストコミュニケーションにおける受信者の感情面に及ぼす感情特性の影響：電子メールを用いた実験による検討 日本教育工学会論文誌, 31, 403-414.
- Lazarus, R. (1994). The stable and the unstable in emotion. Ekman, P. & Davidson, R. J. (Eds.) *The nature of emotion: Fundamental Questions*. New York: Oxford University Press. pp. 79-84.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982). Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 小浜 駿 (2010). 先延ばし意識特性尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 教育心理学研究, 58, 325-337.
- 黒川雅幸 (2013). もったいない情動特性の構成概念妥当性の検証 福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編, 62, 33-40.
- 黒川雅幸 (2014). もったいない感情の心的機能に関する研究 実験社会心理学研究, 53, 93-107.
- Magai, C., Distal, N., & Liker, R. (1995). Emotion socialization, attachment, and patterns of adult

- emotional traits. *Cognition and Emotion*, 9, 461-481.
- 三根久代 (1995). 幼児期における感情特性の発達 – 基本情動と自己制御機能との関連 聖和大学論集 教育学系 23, 119-127.
- 三根久代 (1998). 幼児教育・保育系学生における感情特性 聖和大学論集 教育学系 26, 97-102.
- 三根久代 (1999). 幼児教育・保育系学生における感情特性(2) 入学者選抜方法が与える影響: 短期大学の場合 聖和大学論集 教育学系 27, 85-90.
- 水子 学・寺崎正治・金光義弘 (2002). 感情特性が対人相互作用量に及ぼす影響: 結果予期と効力予期の媒介的役割 性格心理学研究, 10, 98-107.
- MMPI 新日本版研究会 (1993). 新日本版 MMPI マニュアル 三京房
- 野口素子・佐藤弥・吉川左紀子 (2005). 情動喚起刺激としての映像: 日本人被験者による評価実験 電子情報通信学会技術研究報告, 104, 1-6.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 – 精神的回復力尺度の作成 – カウンセリング研究, 35, 57-65.
- Rothbart, M. K. (1981). Measurement of temperament in infancy. *Child Development*, 52, 569-578.
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No. 609), 1-28.
- 齊木久代 (2014). 過去 20 年間ににおける保育系学生の情動特性の変化 聖和論集 42, 13-22.
- 坂上裕子 (1999). 感情に関する認知の個人差 – 感情特性と曖昧刺激における感情の解釈との関連 – 教育心理学研究, 47, 411-420.
- 佐藤徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, 9, 138-139.
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., Lushene, R., Vagg, P. R., & Jacobs, G. A. (1983). *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.
- 寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一 (1994). 感情状態尺度による特性評価 日本心理学会第 58 回大会発表, 939.
- Watson, D., & Clark, L. A. (1994). Emotions, moods, traits, and temperaments: Conceptual distinctions and empirical findings. Ekman, P. & Davidson, R. J. (Eds.) *The nature of emotion: Fundamental Questions*. New York: Oxford University Press. pp. 89-93.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 1063-1070.
- Watson, D., & Vaidya, J. (2003). Mood measurement: Current status and future directions. In Schinka, J. A. & Velicer, W. F. (Eds.) *Comprehensive handbook of psychology: Vol. 2. Research methods*, New York: Wiley, pp. 351-375.
- 山内星子 (2008). 認知的評価・感情喚起の個人差: 状況的測定ツールの作成 発達研究, 22, 203-212.
- 山内星子 (2009). 母親の怒り特性が幼児の怒り特性に与える影響 – 媒介変数としての感情会話に着目して 発達研究, 23, 175-188.
- 山内星子 (2010). 母親の感情特性が青年の感情特性に与える影響: 感情のデュアルプロセスモデルの枠組みから 発達心理学研究, 21, 287-295.
- 横山和仁・荒記俊一 (1994). 日本版 POMS 手引 金子書房

吉津潤・関口理久子・雨宮俊彦 (2013). 感情調節尺度 (Emotion Regulation Questionnaire) 日本語版の作成 感情心理学研究, 20, 56-62.

ENGLISH SUMMARY

Development of subjective affective trait scale: Reliability and validity of the affective trait scale based on basic emotions

HIRAI Hana

This study developed a subjective affective trait scale (SATS) based on basic emotions and examined its reliability and validity. In Research1 of Study1 (Time1: $N = 192$, Time2: $N = 299$), SATS had positive correlations with each of affective traits (DES-IV) and emotional states, happiness of SATS had positive correlations with resilience and reappraisal, and negative emotions of SATS negatively related with emotion regulation. The partial correlations between SATS and the other variables were analyzed, using DES-IV as the control variables. The results showed that surprise, sadness, anger, and disgust of SATS were negatively correlated with emotion regulation. These results indicated that it had sufficient convergent validity. In Research2 ($N = 118$), LOC (Locus of Control) had negative correlations with sadness, anger, and disgust of DES-IV, whereas it had positive and negative correlations with happiness and surprise of SATS and these indicated that SATS had sufficient discriminant validity. In addition, Cronbach's α s, test-retest reliabilities, and confirmatory factor analysis indicated SATS' acceptable reliability. In Study2 ($N = 134$), SATS predicted emotional states in daily life and it showed that it had sufficient predictive validity. From a series of studies, the reliability and validity of SATS were demonstrated.

Key Words: affective trait, basic emotion, emotional state, validity, reliability.